

題目：集団を超えた全体への協力と集団間の話し合い及び共通運命の認識の相互影響過程
—仮想世界ゲームにおける社会的表象

氏名：朱 瑤

指導教員：大沼 進

有限の資源をめぐり、集団間や集団と個人間に様々な葛藤が生じうる中で、どうすれば人は自己や自集団だけではなく、社会全体の視点から捉え、行動できるのだろうか。本研究は、共通運命の認識に着目し、集団を超えた全体への協力を実現する過程を明らかにすることを大きな目標とする。

様々な資源をめぐり、集団間や集団と個人間の相互作用が不可避免的に生じる。資源をめぐる相互作用には社会的ジレンマの要素、相互依存関係、集団間格差などが存在する。こうした状況において、自己や自集団の利益のみに執着せず、社会全体にとっての利益に目を向け、対立の解消を実現することは容易ではない。Sherif et al. (1961)は集団を超えた全体への協力を促進するには共通目標の導入の重要性を指摘したが、垂澤・広瀬 (2003) は同様の知見を得つつも集団格差により協力の程度も異なることを示した。しかし、外在的な利害構造が同じでも主観的な状況の認識によって行動が異なる。また、全集団の利害が共通であるという共通運命の認識が大事といっても、それがどのように形成されるのかも明らかにする必要がある。そこで、本研究は共通目標をめぐる集団間の話し合いと集団間の友好的な接触に注目した。さらに、集団間の複雑なダイナミクスにおいて、協力するか対立するかは個人の主観的な認識だけではなく、集団レベルでの相互作用過程として捉えるべきである。以上を踏まえて、本研究の目的は以下の2つである。1つ目は外在的な利害構造と主観的な共通目標の認識が、集団を超えた全体への協力にもたらす効果を検討することである。2つ目は集団間の話し合いや集団間の友好的な接触に着目し、全体への協力に至るまで、共通運命の認識の形成プロセスを検討することである。上記の目的を検討するため、2つの研究を行った。手法としては、仮想世界ゲーム (広瀬, 1997; 2011) を用いた。

研究1では、外在的にもたらされる共通危機 (例えば地球規模の環境問題) とその共通危機に対する主観的な認識である共通運命の認識に着目し、1) 全体への協力に関わる事柄が格差のある集団間で異なるのか、また、共通危機発生前後で変化するかを調べ、2) 共通運命の認識が集団間の話し合いにより形成され、全体への協力を促進するという要因連関を明らかにし、3) これらの集団ごとの表象の違いを記述的に検討した。大学生 386 人を対象

に10ゲームを行った。その結果、環境問題が発生した後、環境問題に関する話し合いが増え、寄金への受容も上昇した。このことから、全体への協力を促進するには実際の危機が発生することの重要性が示唆された。また共通危機発生前に、共通運命の認識が高まっていたことから、実際の共通危機が発生する前の段階から、社会全体に視点を置いた共通運命の認識の形成が可能である可能性が示唆された。また、共通運命の認識が共通危機をめぐる集団間の話し合いにより形成され寄金の受容を促進するというプロセスが確認できた。

研究2では、共通危機に限定せず広範囲の共通運命の認識に注目し、1) 研究1と同様に全体への協力に関わる事柄が集団間に差があるのか、共通危機発生前後に差があるのかに加え、2) 集団間の友好的な接触と全体への協力に関わる事柄との関連、3) それらの変数間の関連は時系列でどのように変化するか、を検討した。大学生33人を対象に1ゲームを行った。その結果、環境問題が発生した後、環境問題に関する話し合いが増え、寄金への受容が上昇した。環境問題が発生する前に特に豊かな地域が共通運命の認識と寄金の受容の上昇が顕著であった。このことから、全体への協力を促進するには実際の共通危機の発生も重要であるが、その前の段階から、共通運命の認識の形成が社会全体に視点を置き、全体への協力につながる可能性が示唆された。共通運命の認識の形成プロセスについて、地域単位の分析では集団間の友好的な接触と共通運命の認識、世界へのアイデンティティ、寄金の受容の間にそれぞれ正の関連が見られた。このことから、集団間の友好的な接触は共通運命の認識の喚起と全体への協力の土台になる可能性が示された。

2つの研究を通じて、有限の資源をめぐる集団間や集団と個人間に様々な葛藤が生じうる中で、個人間・集団間の相互作用の集積がマクロな集合行為へ、マクロな状況としての初期の構造的与件がマイクロとしての個人の意思や行動に与える影響というマイクロマクロのダイナミックスを観察できた。このような観察を通じ、共通運命の認識が形成されることで、集団を超えた全体への協力が達成可能となる可能性の一端を示した。現実場面において、実際に誰かが共通危機を発生させることを通じて全体への協力を実現することはあり得ない。むしろ、当該の危機が発生する前に、必ずしもある共通危機に限定せずとも共通目標の認識を喚起し集団間で共有できることが重要となってくる。

同じ状況でも、対立ではなく協力すべきという認識を喚起し、そしてそれを共有化された社会的事実としていく必要がある。そのために、葛藤要素ではなく共通利害をめぐる話の場を設置することが重要な一歩であると本研究は提言する。